

鷺目一貫文送り給ひ候ひ了んぬ。妙法蓮華經の御宝前に申し上げ候ひ了んぬ。

抑日本国と申す国は須弥山よりは南、一閻浮提の内縦広七千由旬なり。其の内に八万四千の国あり。所謂五天竺十六の大国、五百の中国、十千の小国、無量の粟散国、微塵の島々あり。此等の国々は皆大海の中にあり。たとへば池にこのはのちれるが如し。此の日本国は大海の中の小島なり。しほみてば見へず、ひればすこしみゆるかの程にて候ひしを、神のつき出ださせ給ひて後、人王のはじめ神武天皇と申せし大王をはしましき。それよりこのかた三十余代は仏と経と僧とはましまさず。たゞ人と神とばかりなり。仏法をはしまさねば地獄もしらず、浄土もねがはず。父母兄弟のわかれありしかども、いかんがなるらん。たゞ露のきゆるやうに、日月のかくれさせ給ふやうに、うちをもいてありけるか。然るに人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に、此の国より戌亥の角に当たりて百濟国と申す国あり。彼の国よりせいめい王と申せし王、金銅の釈迦仏と、此の仏の説かせ給へる一切経と申すふみと、此をよむ僧をわたしてありしかば、仏と申す物もいきたる物にもあらず、経と申す物も外典の文にもにず、僧と申す物も物はいへども道理もきこへず、形も男女にもにざりしかば、かたがたあやしみをどろきて、左右の大臣、大王の御前にしてとかう僉議ありしかども、多分はもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ、僧はいましめられて候ひしほどに、用明天皇の御子聖徳太子と申せし人、びだつの三年二月十五日、東に向かひて南無釈迦牟尼仏と唱へて御舍利を御手より出だし給ひて、同六年に法華經を讀誦し給ふ。

それよりこのかた七百余年、王は六十余代に及ぶまで、やうやく仏法ひろまり候ひて、日本六十六箇国二つの島にいたらぬ国もなし。国々・郡々・郷々・里々・村々に堂塔と申し、寺々と申し、仏法の住所すでに十七万一千三十七所なり。日月の如くあきらかなる智者代々に仏法をひろめ、衆星のごとくかゞやくけんじん国々に充滿せり。かの人々は自行には或は真言を行じ、或は般若、或は仁王、或は阿弥陀仏の名号、或は観音、或は地藏、或は三千仏、或は法華經讀誦しをるとは申せども、無智の道俗をすゝむるには、たゞ南無阿弥陀仏と申すべし。譬へば女人の幼子をまうけたるに、或はほり、或はかわ、或はひとりなるには、母よ母よと申せば、きゝつけぬれば、かならず他事をすてゝたすくる習ひなり。阿弥陀仏も又是くの如し。我等は幼子なり。阿弥陀仏は母なり。地獄のあな、餓鬼のほりなどにをち入りぬれば、南無阿弥陀仏と申せば音と響きとの如く、必ず来たりてすくひ給ふなりと、一切の智人ども教へ給ひしかば、我が日本国かく申しならはして年ひさしくなり候。

然るに日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の將軍等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候ひしかば、日本国七百余年に、一人もいまだ唱へまいらせ候はぬ南無妙法

蓮華經と唱へ候のみならず、皆人の父母のごとく、日月の如く、主君の如く、わたりに
船の如く、湯して水のごとく、うえて飯の如く思ひて候南無阿弥陀仏を、無間地獄の業
なりと申し候ゆへに、食に石をたひたる様に、がんせきに馬のはねたるやうに、渡りに
大風の吹き来たるやうに、じゆらくに大火のつきたるやうに、俄かにかたきのよせたる
やうに、とわりのきさきになるやうに、をどろきそねみねたみ候ゆへに、去ぬる建長五
年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間、退転なく申しつより候事、月
のみつるがごとく、しほのさすがごとく、はじめは日蓮只一人唱へ候ひしほどに、見る
人、値ふ人、聞く人耳をふさぎ、眼をいからかし、口をひそめ、手をにぎり、はをかみ、
父母・兄弟・師匠・ぜんつもかたきとなる。後には所の地頭・領家かたきとなる。後には
一国さはぎ、後には万人をどろくほどに、或は人の口まねをして南無妙法蓮華經とと
なへ、或は悪口のためにとなへ、或は信ずるに似て唱へ、或はそしるに似て唱へなんど
する程に、すでに日本国十分が一分は一向南無妙法蓮華經、のこりの九分は或は両方、
或はうたがひ、或は一向念仏者なる者は、父母のかたき、主君のかたき、宿世のかたき
のやうにのゝしる。村主・郷主・国主等は謀叛の者のごとくあだまれたり。かくの如く
申す程に、大海の浮木の風に随ひて定めなきが如く、軽毛の虚空にのぼりて上下するが
如く、日本国ををはれあるく程に、或時はうたれ、或時はいましめられ、或時は疵をかほ
ふり、或時は遠流、或時は弟子をころされ、或時はうちをはれなんどする程に、去ぬる
文永八年九月十二日には御かんきをかほりて、北国佐渡の島にうつされて候ひしなり。
世間には一分のとがもなかりし身なれども、故最明寺入道殿・極楽寺入道殿を地獄に墜
ちたりと申す法師なれば、謀叛の者にもすぎたりとて、相州鎌倉竜口と申す処にて頸
を切らんとし候ひしが、科は大科なれども、法華經の行者なれば左右なくうしなひなば、
いかんがとやをもはれけん。又遠国の島にすてをきたるならば、いかにもなれかし。
上にくまれたる上、万民も父母のかたきのやうにおもひたれば、道にても又国にて
も、若しはころすか、若しはかつえしぬるかにならんずらんとあてがはれて有りしに、
法華經十羅刹の御めぐみにやありけん、或は天とがなきよしを御らんずるにやありけん。
島にてあだむ者は多かりしかども、中興の次郎入道と申せし老人ありき。彼の人は年ふ
りたる上、心かしこく身もたのしくて、国の人にも人とをもはれたりし人の、此の御房
はゆへある人にやと申しけるかのゆへに、子息等もいたうもにくまず。其の已下の者ど
もたいし彼等の人々の下人にてありしかば、内々あやまつ事もなく、唯上の御計らひの
まゝにてありし程に、水は濁れども又すみ、月は雲かくせども又はるゝことはりなれば、
科なき事すでにあらわれて、いゝし事もむなしからざりけるかのゆへに、御一門諸大名
はゆるすべからざるよし申されけれども、相模守殿の御計らひばかりにて、ついにゆり
候ひてのぼりぬ。たゞし日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をならぶる人は先代に
もあるべからず、後代にもあるべしとも覚えぬ。其の故は去ぬる正嘉年中の大地震、文
永元年の大長星の時、内外の智人其の故をうらなひしかども、なにのゆへ、いかなる事

の出来すべしと申す事をしらざりに、日蓮一切経蔵に入りて勘へたるに、真言・禅宗・念仏・律等の権小の人々をもつて法華経をかるしめたてまつる故に、梵天・帝釈の御とがめにて、西なる国に仰せ付けて、日本国をせむべしとかんがへて、故最明寺入道殿にまいらせ候ひき。此の事を諸道の者をこずきわらひし程に、九箇年すぎて去ぬる文永五年に、大蒙古国より日本国ををそうべきよし牒状わたりぬ。此の事のあふ故に、念仏者・真言師等あだみて失はんとせしなり。例せば、漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に、上陽人と申せし美人あり。天下第一の美人にてありしかば、楊貴妃と申すきさきの御らんじて、此の人、王へまいるならば我がをぼへをとりなんとて、宣旨なりと申しかすめて、父母兄弟をば或はながし、或は殺し、上陽人をばろうに入れて四十年までせめたりしなり。此もそれにて候。日蓮が勘文あらわれて、大蒙古国を調伏し、日本国かつならば、此の法師は日本第一の僧となりなん。我等が威徳をとろうべしと思ふかのゆへに、讒言をなすをばしるしめさずして、彼等がことばを用ひて国を亡ぼさんとせらるゝなり。例せば、二世王は趙高が讒言によりて李斯を失ひ、かへりて趙高が為に身をほろぼされ、延喜の御門はしへいのをとゞの讒言によりて、菅丞相を失ひて地獄におち給ひぬ。此も又かくの如し。法華経のかたきたる真言師・禅宗・律僧・持斎・念仏者等が申す事を御用ひありて、日蓮をあだみ給ふゆへに、日蓮はいやしけれども、所持の法華経を釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・日月・四天・竜神・天照太神・八幡大菩薩、人の眼をおしむがごとく、諸天の帝釈をうやまうがごとく、母の子を愛するがごとく、まぼりおもんじ給ふゆへに、法華経の行者をあだむ人を罰し給ふ事、父母のかたきよりも、朝敵よりも重く大科に行なひ給ふなり。

然るに貴辺は故次郎入道殿の御子にてをはするなり。御前は又よめなり。いみじく心かしかかりし人の子とよめとにをはすればや、故入道殿のあとをつぎ、国主も御用ひなき法華経を御用ひあるのみならず、法華経の行者をやしなはせ給ひて、としどしに千里の道をおくりむかへ、去りぬる幼子のむすめ御前の十三年に、丈六のそとばをたてゝ、其の面に南無妙法蓮華経の七字を顕はしてをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ、其の風にあたりて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿、其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生まれん。況んやかのそとばに随喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼のそとばの功德によりて、天の日月の如く浄土をてらし、孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて、後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事、水すめば月うつり、つゞみをうてばひゞきのあるがごとしとをぼしめし候へ等云云。此より後々の御そとばにも法華経の題目を顕はし給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

身延山 日蓮花押

中興入道殿女房